

春を待つ港の猫

古今東西、漁港にはしばしば野良猫が住み着いた。

猫は漁網に悪さをするネズミを退治することから、漁運を呼ぶとして漁師にかわいがられ、駄賃代わりに水揚げしたばかりの魚をもらう。

野良猫と漁師は互恵の間柄だ。

にかほ市の象潟漁港にも古くからそういう野良猫が住み着いていた。猫好きな人にとってはどんな猫もかわいいものだが、野良猫は放置しておくといくら繁殖し、糞尿などで周辺環境が荒むため、近隣住民には疎まれていた。そんな事情もあり、平成27年11月に象潟漁港の野良猫を見守る有志のグループ「きさかた港猫を守る会」が立ち

上げられた。

県有地を借りて猫小屋を設置。定期的な餌を与え、トイレの管理、けが・病気の治療、そしていたずらに猫の数を増やさないために不妊手術も行う。今いる猫の不妊手術をすれば、理論上は将来的に港から猫がいなくなる。同会事務局で木村いぬ・ねこ病院(同市金浦)の木村貴美代院長は「それが最終的な目標です」と話す。

港の猫は今は30匹前後。片耳の先端が欠けているのは、不妊手術済みの印だ。

このような話題が知れ渡ると、決まって港に猫を捨てていく人が現れる。しかしそれだけは「厳に慎んでほしい」と木村先生は力説する。真っ先にカラスに狙われ、風邪な

どの感染症で命を落としてしまうことも珍しくないからだ。飼い猫が望まない仔を産まないために不妊手術はするべきだし、生まれた仔は飼い主の責任で里親探しをしてほしいというのが木村先生の見解。

家で飼えば20年は生きられるであろう猫も、野良化すると頑張っても10年生きられるかどうかだそう。逆に、ペットを飼えない人はここにきて猫たちをかわいがるという。

港の猫たちは皆穏やかな気性で人懐っこい。キャットフードや煮干しをあげると喜んで食べてくれる。

今ある生命を慈しみつつ、不幸な生命は生み出さないことだ。

新 秋田逍遙

文・写真 津島修三

第28回

港の猫たちの里親になりたいと希望する人には木村いぬ・ねこ病院で相談に乗っている。譲渡の際には不妊手術代を負担してもらっている。(電話 0184・44・8840)